

時代の風 西水美恵子 元世界銀行副総裁

海外からわが国を訪れる観光客が増えている。欧米諸国の知人にも、休暇旅行に初めて日本を選ぶ人が多くなった。うれしい傾向だと喜んでいたら、皆まるで申し合わせたように「一回で結構！」と苦笑した。

観光部門は地域活性化に直結する重要な輸出産業。国内どころか世界競争が厳しい部門でもある。観光業界垂涎のリピーター(常連)なしには、競争に負けるリスクが高まる。成長部門として持続的に発展するためには、類あっても比のない観光体験を提供する戦略が要る。

この観光戦略に見落とせないのが、欧米諸国に増え続ける「バカンス人種」。私の知人たちもそのうちで毎年数週間の休暇をとる。旅する国はどこでも、好む宿には長逗留。所によって

海外からの観光客

は家を借り、自然環境と歴史に培われた文化と、土地の人の絆に癒やされる休暇を好む。気に入ると飽きまじらない常連になるのだ。

その「バカンス人種」に嫌われた理由は、二つあった。一つは、言語の壁からくる情報不足。出発前にこの壁に突き当たったのだ。普段は旅行会社に頼らな

「無比の体験」提供必要

い人種で、ガイドブックやインターネットを駆使して旅程を組みのめ楽しみのうち。だが、欧米で出版される日本の旅行案内書はお粗末。京都や奈良など名高い観光地以外は、役に立つ情報がない。ネット上の情報も外国語ではごく限られ、日本列島のどこを目的地に

絞るかという判断がままならなかったというわけだ。もう一つの理由は、わが国の代表的な旅行文化。仕方なしに旅行社を使ったのがいけなかった。今日は東京、明日は日光、それから富士山、京都、奈良と駆け巡る日本流物見遊山の旅で「わざわざ疲れに行ったよなもの」だったそう。

その上、宿は大ホテル。アン旅行欄「A taste of old Japan in a mountain ryokan」(「日本古来の味を山里の旅館で」2012年2月3日)を勧めた。飛騨高地の山里馬瀬と、丸八旅館という小さな料理旅館の紹介記事だ。同紙ネット版に掲載されて以来海外から来客が絶えず、「いい方ばかりで、女将を喜ばせている。わが知人たちにも稀有な情報源

英国人。彼が選ぶ宿は、それぞれ個性豊かな旅館だ。古民家や蔵など古い建物を生かす宿が多く、残らず地産地消に徹底している。そろってすてきな女将とご亭主が見事なチームワークで経営し、地域社会という小宇宙の結いに生き生きとしている。昨年の本欄で紹介した丹波の「集落丸山」も、丸八旅館と共に定宿だ。最近「九州に帰る宿ができた」と、夫が喜ぶ。熊本市の江津湖畔にたえず「湧泉の宿・藻乃花」がその一つ。市内とは思えない静寂な自然環境と共に、大正時代の心地よい和洋折衷インテリアや、郷土愛の心が伝わる創作料理、阿蘇伏流水の薬草湯などが、彼を「ここなら日本に住みたい」とまで言わせた。

「サービスはいいが、コンベヤーベルトの流れ作業。部屋は奇麗だが世界中どこにでもある内装で「日本だ」という感動がない。「世界無形文化遺産になった和食を味わう機会も少なかった」と嘆く人さえいた。なんともつたいないことをと、本欄で紹介したことがある英国紙ザ・ガーディアン旅行欄「A taste of old Japan in a mountain ryokan」(「日本古来の味を山里の旅館で」2012年2月3日)を勧めた。飛騨高地の山里馬瀬と、丸八旅館という小さな料理旅館の紹介記事だ。同紙ネット版に掲載されて以来海外から来客が絶えず、「いい方ばかりで、女将を喜ばせている。わが知人たちにも稀有な情報源

5(1930)年、先々代が温泉保養のために建てた別荘で、山田家の人々が戦後そのまま宿として営んでいる。温泉街の路地から門を入ると古き良き日本の別荘が広がり、思わず「たいたいま」と言いたくなる宿だ。地元の工芸作家や若い芸術家たちの集いと展示の場でもあり、それがまた客を喜ばせる。山田別荘は、地球のどこからでもオンライン予約が可能なることも手伝って、海外での知名度が高い。女将は「外国人の方でもっているようなもの」と笑う。

「バカンス人種」にこよなく愛される宿は、日本が世界に誇れる観光資源だ。「類あっても比のない」ビジネス戦略を黙々と実践し続け、地域活性化に貢献している。世界がその価値を認める日は、遠くない。



—竹内紀巨撮影